

日本と中米・カリブ諸国の新しいパートナーシップに向けて

田中 高

今年は日本と中米諸国との外交関係樹立 80 周年の記念の年にあたるとともに、昨年は日本・カリブ交流年で、安倍総理は総理大臣として初めて、カリブ海諸国のトリニダード・トバゴを訪問した記念すべき節目の年となった。また長年にわたり対立を続けてきたアメリカとキューバの間に国交正常化の兆しが見えてきたこともあり、この地域の安定と繁栄に明るい材料となっている。2015 年 4 月、岸田外務大臣は日本の外相として初めてキューバを訪問した。本稿では日本と中米・カリブ諸国との関係の概要について紹介したい。

中米とカリブの違いと共通点

地理的にはカリブ海を挟んで隣接するため、一般には中米・カリブと一括りに表現するが、歴史的にはかなりの相違点がある。カリブ海はヨーロッパの列強が植民地獲得を繰り返した戦場でもあり、米国、英国、フランス、オランダなどが勢力拡大にしのぎを削った。カリブ海の重要性は、新大陸とヨーロッパを結ぶ海上の要路であったこと、そしてこの地域で砂糖を豊富に生産したことにある。

中でも砂糖プランテーションは格別の意義があり、産業革命が必要とした労働者のカロリー源、ラム酒の原料として貴重であった。かくしてカリブ海は、ヨーロッパからアフリカに武器や雑貨を送り、奴隷を新大陸に輸出、新大陸から砂糖、綿花、タバコ、コーヒーを輸出する、三角貿易の中心となり、「世界史」の舞台で重要な役割を果たしたのである。

いっぽう中米 7 か国（北からグアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ＝中米 5 か国。それにパナマを加える。さらに 1981 年に英国から独立したベリーズが入る）は、南北アメリカ大陸を結ぶ、鎖のような役目を果たす細長い地峡に位置する。地峡の東側はカリブ海に面し、西側にはアジア諸国につながる広大な太平洋が横たわる。中米諸国はスペインの植民地となったことから、スペイン語を話し、キリスト教文化を共有している。

中米諸国は、南北アメリカ大陸を分断するアングロサクソン文化と、イベロアメリカ文化、アジアとヨーロッパを隔てる太平洋とカリブ海の交錯地点＝十字路に位置する。しかし地峡には、これという天然資源もなく、「世界史」に登場することは多くはなかった。19 世紀にスタートしたコーヒー生産や、米国系多国籍企業の嚆矢となるユナイテッドフルーツ会社のバナナ生産など、世界市場に参入はしたが、世界経済システムに大きなインパクトを与えるものではなかった。中米地峡が注目されるのは、80 年代の中米紛争以降ではなかろうか。

中米とカリブの一体性

このようにカリブ海諸国と中米諸国の間には、隣接するという地理的な条件はあるものの、歴史的に見ても必ずしも密接な関係があったわけではない。旅行する際にも直行便の運航数が限られているため、いったん米国に出てから乗り換えるのが一般的である。とはいえ、両者の関係を一体化させようとする動きのあったことも見逃せない。

たとえば 1982 年に当時のレーガン政権が打ち出した「カリブ開発計画＝CBI」がある。CBI は中米・カリブ海諸国を一つの経済圏としてとらえて、対米輸出を促進させることで、経済開発を推し進めようとした。CBI によりマキラドーラ型の繊維産業が中米とドミニカ共和国（ドミニカ国との混同に注意）、ハイチなどで広がった。中米共同市場（CACM）が発展的に解消し、カリブ海で最大の経済規模を有するドミニカ共和国が参加することで、現在の DR-CAFTA（米・中米・ドミニカ共和国自由貿易協定）がスタートした。91 年に発足した中米統合機構（SICA）は本部をエルサルバドルに置き、中米 7 か国に加えてドミニカ共和国も参加している。このようにドミニカ共和国は中米諸国との結びつきを強化している。

総理のトリニダード・トバゴ、岸田外相のキューバ訪問
カリブ海諸国の域内協力は、1973 年に設立されたカ

リブ共同体 (CARICOM = カリコム) が中心で、アンティグア・バーブーダ、バハマ、バルバドス、ベリーズ、ドミニカ国、ハイチ、グレナダ、ガイアナ、ジャマイカ、セントクリストファー・ネーヴィス、セントルシア、セントビンセント及びグレナディーン諸島、スリナム、トリニダード・トバゴなど合計 14 か国が参加している。これらの国にはスペイン以外の植民地であったという共通点がある。前述のように昨年 7 月に安倍総理大臣がトリニダード・トバゴを訪問し、カリコム首脳との会談が実現した。日本の対カリコム政策を、①小島嶼国特有の脆弱性を含む持続的発展に向けた協力、②交流と友好の絆の拡大と深化、③国際場裡における協力の 3 点として表明した。

現在米国とキューバの国交正常化交渉が進みつつある。歴史的に見て、キューバはカリブ海の最大規模の国であり、「砂糖輸出に依存しない経済構造が構築されれば、長期的には域内の最富裕国に復活する可能性がある」という指摘がある¹。

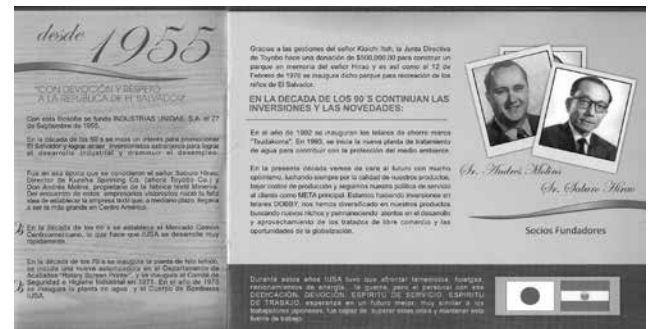
いささか古い話ではあるが 1970 年代、自由主義圏でキューバの最大の貿易相手国は日本であった。財界の首脳陣は定期的にハバナを訪問し、フィデル・カストロ国家評議会議長と長時間懇談した。75 年の日本とキューバの貿易総額は 2,320 億円に達した。キューバは日本に砂糖を輸出し、日本からは建設機器、プラントなどの工業製品を輸出した²。カリブ海におけるキューバの存在には大きなものがあり、日本と中米・カリブのパートナーシップにも、少なからず影響を及ぼすと見られる。

2015 年 4 月 30 日から 5 月 3 日にかけてキューバを訪問した岸田外務大臣は、ラウル・カストロ国家評議会議長、フィデル同前議長と会談した。約 30 名の日本企業関係者が随行し、貿易拡大への期待が高まっている。日本と現地のメディアは異例な扱いで大きく報道した。

日本・中米の関係を振り返ると

日本は 1935 年、中米 5 か国と外交関係を樹立した。外交記録では、5 か国はメキシコに置かれた日本公使館の兼轄となっている。大戦の勃発により 42 年 2 月に引き揚げている。大戦後は 53 年から 54 年ごろに再開し、60 年代の初めに大使館に昇格して今日に至っている。しかしエルサルバドルのように、内戦の影響で一時期業務を停止していたケースもある。10 年前の日本・中米交流 70 周年の際、在ニカラグア日本大使館が出

版した『日本とニカラグア』(原文スペイン語³)には、ニカラグアの在京初代総領事エドガル・トレス・レアルとその家族の写真が掲載されているが、中米諸国も戦前から日本との外交に力を入れていた様子が窺える。



エルサルバドル ユサ社 (同社パンフレットより)

日本と中米・カリブ諸国との直接の結びつきはそれほど強いものではないが、以下紹介する日系企業のように、現地で大活躍しているケースがある。

エルサルバドルで操業するユサ社は、東洋紡がほぼ全額出資する紡績企業である。1955 年、呉羽紡績 (66 年東洋紡と合併) が戦後最初の日系企業の海外進出として設立した。今年創立 60 周年を迎える。ユサ社は内戦中も操業を続けてきたほとんど唯一の外資系企業で、現地での知名度も高い。さらにヒラオ公園など企業の社会貢献にも力を入れてきた。紡績・織布・加工一貫設備は、中米域内でも屈指の規模である。近隣諸国にも製品を輸出している。業績も好調なようで本年 2 月に筆者が同社を訪問した際のインタビューでは、「新生 IUSA」を目指して、「これからはアメリカ大陸全体のなかで、将来の事業展開を構想したい」(寺前社長) とのことであった。

もう一つ紹介したいのは、ニカラグアとエルサルバドルに進出している矢崎総業のケースである。本年 2 月に同社の現地工場を訪問したが、事前に静岡県裾野市にある本部でレクチャーして頂いた。その時「レオンにある工場の従業員は 1 万人」というお話を聞いた。正直なところ、実際にレオンの操業の様子を見るまでは、その数字に半信半疑であった。ニカラグアの総人口は 620 万人。レオンは古都と知られるが、人口は 40 万人強である。同社が進出したのは 2002 年で、現在 4 つの工場でワイヤーハーネス (自動車用組電線) などを生産している。労働集約的な作業内容ということもあり、これだけの数の雇用を創出している。同国で最大規模の企業であると同時に、最大の輸出企業である。

矢崎総業はエルサルバドルのサンタアナにも工場があり、2,000 人の従業員を雇用している。



ニカラグア 矢崎総業 レオン工場前景（筆者撮影）

ニカラグアの経済規模から考えて、レオン工場の雇用者数は空前絶後の大きさと言って過言ではない。地域の経済活動の基盤になりつつある。部品産業ということもあり、知名度は必ずしも高くはないが、間違いなく日本企業の進出の成功例であろう。同社の社是は「世界とともにある企業」「社会から必要とされる企業」である。ニカラグアにとり工場は不可欠な存在であり、是非とも事業を末永く継続して欲しいと願うばかりである。

結びに代えて

以上駆け足で日本と中米・カリブ諸国とのこれまでの関係を紹介してきた。大きな動きとして中米とカリブ諸国のいわば横の結びつきが強まる傾向が見られ、特にアメリカとキューバの国交正常化が進めば、域内のヒト、モノ、カネの動きに大きな弾みがつくと考えられる。さらに日本は従来この地域の国々とは非常に良好な外交関係を維持してきた。まだまだ数の上で十分とは言えないが、進出している日系企業には、上述したように成功している事例もある。

紙幅の関係もあり、本稿では日本がこれまでこの地域に向けて実施してきた経済協力について触れることができなかったが、いずれの国でも高い評価を受けている。また音楽や絵画、エコツーリズムや遺産など、中米・カリブ諸国の持つ観光資源には、巨大な潜在力があり、日本人には魅力のある地域であり続けるであろう。

（たなか たかし 中部大学教授）

1 Bulmer-Thomas, Victor, *The Economic History of the Caribbean since the Napoleonic Wars*, Cambridge University Press, 2012.

2 田中高「日本キューバ貿易小史—通商協定締結の軌跡」『ラテンアメリカレポート』 第29巻第1号、2012年。

3 Juárez Rodríguez, Orient Bolívar, *Japón y Nicaragua: Contribución a la historia de sus relaciones diplomáticas*, Ministerio de Relaciones Exteriores de Nicaragua y Embajada de Japón en Nicaragua, 2006.